特42
459

自然哲学

東京圖書館
和書門
音楽類
函 ナ
架 四七
號 ヌ
冊 一一の

東京帝國大學圖書之印

自然居士

模し者ハ東山雲居寺にあり。

住居せる者なり。実ハ自然居士を

ゝ唱人食乃ち庭にて説法と御

宣ひし百結願にて片はら皆くま

りて聽ゝ人へ（シテ）雲居寺造営乃

札ゝ入ゝ乃ち和尚寺月まつ

狂乱あるべからず。法一向宣しくく
導師高座よりあり。経をよみねうち
あるべし。三宝諸仏十方の菩薩よ
寶号。三世の諸仏十方の菩薩よ
りてまうちく。惣祈の数多の心経
や。是八部諸仏諸天善神
ハうつくしき神。急いて此諷
誦文を唱へ人（シテ）数百ウ（ワキ）ウ風誦
ウ。三寶の僧ハ布施一裏。
きそうさしあ
果の為。その代衣一重。三寶よ借衣
しなば西天乃貧女。一衣を僧
よ供きしへ。乃ほの世乃因縁（中）
貧女乃親乃たあ（上青）
その代衣恨めり

まつ〳〵浮世の中もとく〳〵せちく孝
先祇諸共よ同し量よりまきんと後
あまきを自然者士雲法の神をあらを
ぱうしの乃聽寄ももこの神を濡さぬ
ぱハ可〳〵か様ゝ者ハ東国方
乃人商人中我洗慶都よりあ
人を賞玉てくゝ十四五計成女を賞

取てくゝかの白ゝ乃同眠をもてて仏
打よやアてゝ行ゝ未帰ゝくゝあ渡り
仏ゝ成ゝ乃ゝ者ハ親乃迷善と
やゝんやてゝ行ゝ法の宿数
よあゝまゝ成ゝ自然者生乃ゝ者
寺よゝ乃ゝ子ゝ百よゝ喜ゝみゝもゝるゝ
ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ村ゝ
ゝ成ゝ人ゝ乃ゝ村ゝ

急てつきて法入人へ（和ヲ）やあまひろ
月（ワキ）あるやうあるつまてゆき（和ヲ）
いつに居士へ（ニテ）行ようそ（和ヲ）唯
今酒宴をあきてはせをあきれき
男入者りて迫立て行はよやる
まきとやへはやうかあをとんは行よ
やては（レテ）音曲もあやはなりはせへ
やう有きよみてはこの詞をあきを
はかりはなの小神はかりはなの代言とうへ
てはりもてる當はかり居士より相
手中は従者は親は迫善の為よ
我をは此小神はよりてはをあきた
ると思はざあらへ唯今の者は
高人なてんへしかきは道理てあるへ

ことをうけたまはりて
申さまし　人高人なりしは東国へ下
るべしだに津松なり人基を行とめう
するをそれ　指ば出家をしてはゆま
し屋洗浴と持て行ばやうへて
つかへしまもるべきいやうれへ
今日迄の法法の世なりしいや

く法法百日の貧女たりとも貧悪
の二を并まへる為なりしどの女人善人
高人を悪人貧人乃二道家に接つく
はへりしどの法法去は是迄也ぬ洗
功徳普く於一切衆生皆共
成佛道修行したためあれ
捨人をたまへ
今出

ずこらも、いちやや白浪乃洗舟路をや
急らん舟あくそてもと清
道よろこどめよ　あつく其
は船へおしちう　其ハ山面矢橋れ
わて舟もくしもあきあをげよ招う
きをきて　舟も接へよあちらへ
波乃舟や　さえ其は舟へおや

地

五

ちう　拝洗舟をへ行舟は波へ
ていう　其人買舟事ちうよ
うう音たし行とく　道理く
金有ふそ人や白浪乃音たりと
へ道理ありぞうとつるべ舟漕
ふうふうよ　櫓よかろとよ
物ありぞうと云いきあこう

六

シテ水の煙乃霞をハ一段のつらひをかざして
あはれ三昧ほのらしゝハ令漕るなる
舟あれハかゝて舟ハ舟とハひかゝるり穴
面白くものゝくるれり抑何乃事や
らんシテ是ハ自然居士とや説経者よ
てけがく説法の場さ夜ゐまり恨よよ
なりたり 説法ハ道理を宣給ふ

我らよひの事ありまゐらせと シテ御物すり
ともやよりてころうのもとよかくよ本ずれハ
袖かしまう寸るがおよ所きて叶つと
ぞひゝを濃よひつゝ叶ふなゝに
取付ひきしそ 荒腹立やきあ
うゝ衣よ隠れてえハうひぞも供う
料そてみゝハたもつて数よう

シテ「さりとて色のありけるハあらあらしくや
昨つ遊ん　罪人「何しよ恋しく成きて
シテ「ひき立みれハ　罪人「引ハ縄　同　くちはハ
わらハのろうをハめくらさるとも拝み也
ハヽヽ　シテ詞「意ら使の者やかてつま
て帰よまちて心安くそうらへ
罪人詞「あゝ自然をまつねより御たすけ候へ

シテ「此者をとらへて小袖をとれとハ
れ損もいまし　罪人「まつ此度ハ人を
案よ喚よ候　シテ「何事にて候
罪人「ちんさ神の中よ大法の人あれをと
いふにとやあハ人を売て候ひの
シテ「ちかく法をハ𛀙てまいらせ候まし
シテ「委細承候又神の中よもかくこそ大

法ノ人ガ様ヨウモ侍ヨウ者ヲ
行幸ニ参タレマシネバナラヌ場合
室ヘ帰ラネバナラヌ場合ニ行ヨウ方ノ法
ヲモ教ヘマシヨウ
教ヘテ参ル法ヲモ
教ヘマシ所詮此者トシマシテ
奥ヘ入ル国ヘハ入ラセマシネバナラヌ
ナリマシタ　早　舟ヲモ出サレ者

拷問ヲ致サウ　早　拷問ト云フ捨
ヲ行ヒ　早　命ヲトル　早　命ヲトル
ヲ行フ
サテ命ヲトラウ　早　サテ命
ヲトラウ　早　ヲトリマシタ
申シ上ル　早　いや洪自然居士ヨモ
ありがたう　早　ヨモ行ク
ヲ行フ　早　ヲ行ク

是ハ法ゑ人しなりてハ叶ハぬ能く
知と楽しハ奥ゆゑ人高人の教ゑ
ゆゑ人ゑ賞うハ能く自然と中を
行経者をうひ外ゆゑたるゑんやく
中ハ一大ゆゑ中みてハ行ゑ御を
みつてハけひんまし　扨もも
様ゑ為ハ去おうたを色ハ学会
ゑ行ゑよ色ゑ人ハうを
ゑみてハ　も知ゑ為ハ　おく
自然居士急ゑく舟ゆゑ法ゑ人
いやく　節余ゑ下まハ　行の
節余ゑ人き味法ゑ人　船頭殿
ハ顔の色社おをつゑ人　いやハ
ゑもおをハぬ見ゑ人ハ

ちまたへべう度ばかりやとへとりてなら
自然要乃薬のつ事を承はるく仕
ぱらまつくはべんをあれと申ちまた
あしてあをへ薬まるるすはなくは
平
うれへ法偽りうてはべ年今のごとく
說法宣べく時べて聽宿乃眠里
ぶえちんと高座乃上にて一ちは薬

うるる。奥をくるも其中へは猛よ一
ちはら結ぶへあうれ粗言待
言うてはすをはのうもへ薬
をまべんう洗去と給りうべきら平先
は薬をんて奥厨乃ちをぶりて上あ
うをへしぶもあり乃食をを見て
は薬ぶへ解をと葉ちらば絡よへ

此君と給ひしも是は唯是までぞ
ありし居士もをこよあつてちやとあ
きへつくしおかれも是ハつきあらね
竹のつきあかき志賀の濱の
から松つきあかぬ人の心かれ
柳ゝのとさりと寿め吹よ水も黄
帝の時よりかけて流き貨

狄か散りてより出せり哀よ又
蜘むとくる宇居ありがきを乞ほさん
と志召よ鳥ことつ魚と閑てざらし
きれもありしよ黄帝の臣下よ貨
狄といふ士卒ありか附貨狄庭
上の池のたをそて吹渡をつる節
秋のまゝるよ寒き風みちる柳

の上紫水まうけて蛍とい虫
ぞも屋宅よ落きるか長一塚の上
よ葉つゞ笛小くまちかはれたる
かくも柳の葉ぞ咲くる風よきう
ゆれげよりもし秋霧ぞたらる
蟲のなる葬宮八下と思るめりり
たくみて毎とつくまり黄帝昌よ

あれて鳥江をときわうりて蚩尤を
やすく亡ほ沛公と治めたりす
一萬八千歳とうや 上ニレテ 幼きへ私のきん
乃字をぞきみよもとゝ云たりぬ 梅
よ天子乃は顔をきうも名付
たくまつりぬと一塚と云す此
ヤヲハ コトニ ヤヲハ
ぬ宮君八沛公

さて龍頭鷁首とやらんもしたゞ代々よりもと
これはいにしへ我らが舟をも龍頭
鷁首といはひするとある也
乃子よはちる柳をとつてはみまく
はちく竹をとりつゞき節舟中よ
竹の谷ぬよくありて人ば仏の経
行者の志るしも一切の衆生を

もとさん為なり居士も又其ごとく
ぶをところまゝまきくも僧着をた
すきんをあせずれはちる柳のをとり衣
尋ぬるよ東山にあるは僧の扇の
よよ衣の襟乃かりしをば持ちる故
殊よてはちきくと松ひしよう
はちる柳と云ふ事の始まりなりば居士も

又甚しくぢらされもよは百八の声
をぢらされ乃行よは扇乃ほのぞ門
とり合を見せもる可ハ志賀の浦
まれハ ちり波やく志ら幸濱の
ねの長ちりくとさ波乃ま
ねをぞ志ゆすまてもれぢらより
牧手をもすくるおぞハたもをてた

ひ、絵、早行
手をもるなを寒ハ須よ
しまらをくしぢ。世乃ようつこと打
てれみをく 古今 大伴家持 靏ハ浪乃音ッく
よをてハ月をどしうちぬ風雲ま
よ山ある加乃つどろつくとあれる時
をぞりくる雨ハもくつくとぞちく
乃行のぢらをすり世乃氷のとう

やうしゝ紙をとまうちき紙を松
まり雅言おうもも云乃道べ八重
桜の君よりせうる紙うちうちで
いとうしうちつまてゝよ都よりう
きうしく

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛

明治十七年三月六日翻刻御届
同　年四月十二日別製本御届

翻刻人　京都府平民　寺田熊次郎
下京區第五組麩屋町
錦小路上ル梅屋町十三番戸

定價四錢